

ハンドボールの教材化に関する研究

—小学校体育の授業実践例から—

A Study of Handball as Teaching-materials:
Analysis of Case Studies of Physical Education Class in Primary School

荒木 祥生

ARAKI Sachio

(京都府立洛北高等学校・非常勤講師)

池田 拓人

IKEDA Takuto

(和歌山大学教育学部)

抄録：ハンドボールは、「走・跳・投」の運動要素が含まれているため、学校体育の教材として非常に適していると考えられるが、実際には学校の授業で行われることが少ないのが現状である。本研究では、小学校の体育授業において実際にどのように教材化、簡易化されているのかを整理、分類し、ハンドボールの競技特性や教材価値を明確にしていく。そして、ハンドボールを授業で行う際に参考にでき、広く行われていく一助となることを目的とする。

キーワード：ハンドボール、小学校体育、教材化、簡易化、リードアップゲーム

1. はじめに

ハンドボールは、「走・跳・投」の運動要素が含まれているため、学校体育の教材として非常に適していると考えられる。小学校学習指導要領においても、1998年改訂では「ハンドボールなど加えて可」という記述がなされていたが、2008年改訂では、取り扱う種目としてバスケットボールやサッカーと並んでハンドボールが明確に例示されることとなった。これは、今回の改訂で重視されている「生きる力」を育むことと、それに関連して体育の目標の観点からハンドボールが適していると評価されたため、あらためて教材価値が認識され、理解されたということである。

しかし、学習指導要領に明記されるようになって、実際に授業で行われることは少ない。荒木ら(2011)が、大学生を対象に行ったアンケート調査によると、ハンドボールを高校までの体育の授業で経験したことがある学生が少ないということが明らかになった。授業の中で取り入れるためには、教材化される必要があるが、教師も学生時代に経験がなくハンドボールについての知識が乏しく、どのように教材化して良いかわからないため、授業ではあまり扱われないのである。また、児童もハンドボールという競技を見たことがなく、イメージしにくいということが授業で行うことの障害になっていると考えられる。

ハンドボールは片手でボールを握ることができ、多彩なボール操作ができる。ルール上において、ボールを持って歩ける歩数もバスケットボールに比べて多い。一方で、一つ一つの動作は簡単にできるかもしれない

が、自由度が高いがゆえに様々な動作や技術を同時に行わなければならない、それが難しいことなのではないか。「走・跳・投」の運動要素を同時に行うことは子ども達にとっては、非常に難易度が高いと言えるのである。つまり、ハンドボールの技術構造そのものに難しさがああり、一般的に授業で行われることが少ない原因のひとつになっているとも考えられる。

そこで、体育授業の中では実際にどのように教材化されているのかに目を向けた。現在、報告されているハンドボールに関する授業実践報告は小学生を対象にしたものがほとんどである。中学生や高校生は初めからゲーム形式の授業を展開することができるが、小学生ではそうはいかない。発達段階の低い小学生に対してどのような授業を展開するとよいのかということが難しいのであるが、簡易化されている部分を見れば、ハンドボールのどの部分が難しいのかを見いだせるのではないかと考えた。本研究では小学校体育におけるハンドボールが授業においてどのように教材化されているのかを過去の授業実践や研究報告から整理、分類する。そして、ハンドボール特有の魅力や教材価値を明確にし、ハンドボールを授業で行う際に参考にでき、多くの人がハンドボールの魅力を知り、広く行われていく一助となることを目的とする。

2. 学習指導要領におけるハンドボールの位置付け

1998年の改訂まで、ハンドボールは小学校の学習指導要領に示されていなかったが、1998年改訂の小学校学習指導要領で初めて明記されることとなった。ただ

し、「ハンドボールなど加えて可」という記述にとどまっていた。つまり、ハンドボールは授業でやっても良いし、やらなくても良いということである。その後、2008年の改訂では、取り扱う種目としてバスケットボールやサッカーと並んでハンドボールが示されることとなった。これは、今回の改訂で重視されている「生きる力」を育むこと、それに関連して体育の目標の観点からハンドボールが適しており、ハンドボールの教材価値が認識され、理解されたということである。

しかし、学習指導要領でバスケットボールやサッカーと並んで同じ扱いがされるようになったが、実際にハンドボールが授業で行われていることは少ない。ゴール型の球技では、主に手を使う種目はバスケットボール、主に足を使う種目はサッカーという組み立てになっている。学習指導要領に明記されたからといって必修になったわけではないので、急に授業で行われることは難しい。例えば、サッカーに替えてハンドボールを指導しなければならないというような変更をしまうと、現場の教師は困るだろう。

必修ではないにしろ学習指導要領に明記されたということには大きな意味がある。学習指導要領は約10年毎に改訂されているが、現行指導要領の経過がどうであったか、成果がどうであったかを考え、次の改訂が行われる。そこでハンドボールが明記されるようになったということは、実質的にはハンドボールの教材価値が徐々に認められ、授業で行うべき教材であると捉えられるようになったと考えられる。

3. 「ハンドボール研究」に掲載された実践報告の分析

本研究を進めるにあたって、ハンドボールの教材化や、学校体育におけるハンドボールに関する文献・論文の検索を行った。さらに、ハンドボールの技術や戦術に関する指導方法に関するものについても同様に検索を行った。これらの研究では実践を通して教材価値や問題点などを明らかにする研究が数多くされている。そのなかには過去の実践報告をまとめ、整理されてい

るものがある。

先行研究では、過去の実践報告において教材化の際にどのような工夫がなされているかをまとめたものはあるが、なぜそのような工夫がされているのかは明確に示されていない。本研究では、実践における教材化の際の工夫の観点を明らかにすることでハンドボールの難しさを整理するため、過去の実践報告の分析を行っていく。

分析対象として、日本ハンドボール協会発行「ハンドボール研究」に掲載された小学校体育授業における実践報告をすべて収集した。収集した実践報告において教材として簡易化されている部分を後述の分析項目によって分類し、分析することとする。

分析項目は、「場」や「用具」などの工夫をしたものを〔1. 物的条件〕とし、行為によるルールの変更の工夫をしたものを〔2. 行為条件〕とした。また、低段階から高段階なものへ授業を展開しているもの、リードアップゲームの導入がされているものを〔3. 教材配列による工夫〕とした。さらに、それらを細かく分類したものが以下の分析項目である。これらの項目に重複して該当しているものもある。なお、これらの項目は宮本（2000）の先行研究を参考に設定した。

〈分析対象〉（59実践；表1参照）

・ハンドボール研究

第1号（1999年）～第13号（2011年）

〈分析項目〉

1. 物的条件

- ①コートの変更
- ②ゴールの変更
- ③ゴールエリアの変更
- ④ボールの変更
- ⑤プレーヤー人数の変更

2. 行為条件

- ⑥歩数制限
- ⑦ドリブル

3. 教材配列による工夫

- ⑧低段階から高段階へ
- ⑨リードアップゲームの導入

※全実践を上記項目別に分類したものを表2に示した。

表1 分析対象とした授業実践一覧

	タイトル	著者	掲載号	年
[1]	小学校体育の新しい方向とボール運動	杉山重利	第1号	1999
[2]	小学生のためのハンドボールゲームの教材づくりに関する研究	小林和子・大西武三 角紘昭・佐藤靖	第1号	1999
[3]	ランニングハンドボールの授業作りー小学校2年生ー	澤田浩	第1号	1999
[4]	ゲーム領域ー小学校3年生ー	泉智恵	第1号	1999
[5]	小学校におけるハンドボールの教材化について	宮本真一	第2号	2000
[6]	「みんなでシュート」(小学校4年生)	西本千恵子	第2号	2000
[7]	低学年におけるボールゲームの指導のあり方についてー感覚づくりを中心にしてー	木谷光男	第2号	2000
[8]	一緒につくろう！楽しいゲーム	宮田直子	第2号	2000
[9]	ハンドボール実践報告	海老名久美子	第2号	2000
[10]	5年 ハンドボール (学習指導案)	鶴飼克博	第2号	2000
[11]	中学年におけるハンドボールの実践	信原悦治	第2号	2000
[12]	4年 エリアハンドボール	小島信行	第2号	2000
[13]	ボールゲームの教材開発のすすめー低学年からハンドボール型ゲームをー	山本繁	第2号	2000

[14]	侵入型球技の基本種目としてのハンドボールー1年生ハンドボールにおける実践ー	板橋哲	第3号	2001
[15]	わかる・できる易しい戦術学習ーハンドボール型の教材を活用してー	木谷光男	第3号	2001
[16]	ハンドボールの教材としての価値を探る	小山浩	第3号	2001
[17]	走って、もらって、ドン！（高学年）	萩原明恵	第3号	2001
[18]	第6学年体育科学学習指導案（ハンドボール）	高橋るみ子	第3号	2001
[19]	思いきり投げるぞ！大玉ごろろん（中学年）	前田利憲	第3号	2001
[20]	小学校低学年における実践	信原悦治	第3号	2001
[21]	ハンドボールゲームの学習系統：強調能力の養成に向けて	日高利枝・佐藤靖	第4号	2002
[22]	ハンドボールの教材としての可能性を探るー戦術学習を中核とした授業づくりー	信原悦治	第4号	2002
[23]	中学年ハンドボール学習活動案「みんなでつくろう！楽しいハンドボール」	関恵美	第4号	2002
[24]	互いに認め合いみんなが楽しめるゲームの学習ールールや場を工夫したハンドボールの学習を通してー	大山あゆみ	第5号	2003
[25]	子どもの意欲を高める教材・用具の工夫に関する一考察 ハンドボール型ゲームの授業実践を通して	高橋昌平	第5号	2003
[26]	小学生のためのハンドボールの学習指導	大西武三	第5号	2003
[27]	ボール運動教材としてのハンドボールの価値ー新しい体育科教育の方向と球技の教材体系の視点からー	高橋健夫	第5号	2003
[28]	ハンドボールの教材としての可能性を探るー戦術学習を中核とした授業づくりー	信原悦治	第5号	2003
[29]	小学校におけるハンドボールの教材価値と授業づくりの一考察	内田雄三・鈴木聡 村田正之	第6号	2004
[30]	活発なボールゲームの条件ー他のボールゲームとの比較を通してー	山本繁	第6号	2004
[31]	ハンドボールの教材としての系統性を考える	藤井喜一	第6号	2004
[32]	わが国における小学生のためのハンドボールの教材づくりの特徴と問題点ーゲーム教材を中心にー	佐藤靖・木谷光男	第6号	2004
[33]	ハンドボールの教材としての可能性を探るー戦術学習を中核とした授業づくりIIー	信原悦治	第6号	2004
[34]	小学校におけるハンドボールの授業の記録	高松葉司	第6号	2004
[35]	小学校体育科カリキュラムにおけるハンドボールの教材価値ー高学年のゲーム分析で得られた子どもの動きを視点としてー	村田正之・鈴木聡	第7号	2005
[36]	教材としてのハンドボール	角紘昭	第7号	2005
[37]	ボール運動教材としてのハンドボール	林恒明	第7号	2005
[38]	みんなでつくろう みんなで決めよう ハンドボール！	森田康文	第7号	2005
[39]	第5学年1組 体育科学学習指導案	野口美千代	第7号	2005
[40]	小学校におけるボールゲームの指導過程ー1年生から5年生までのハンドボールを中心とした子どもの思考や動きを通してー	木谷光男・佐藤靖	第7号	2005
[41]	戦術学習の楽しさを味わおうハンドボールの授業	山本繁	第8号	2006
[42]	小学校段階におけるハンドボールの教材価値ー楽しさと伸びを実感させる体育科学学習指導の工夫を通してー	児玉清孝	第8号	2006
[43]	小学校高学年におけるハンドボール指導のあり方	川角朋之	第8号	2006
[44]	小学校におけるハンドボールの教材価値に関する研究	外川千春・佐藤靖	第8号	2006
[45]	小学校におけるハンドボールの授業の方法に関する研究ーボールの違いに着目したゲームー	瀬川陽子・富永泰寛 藤田雅文・安田哲也	第8号	2006
[46]	小学校低・中・高学年の系統性を考慮したハンドボール授業ー基礎感覚・基礎技能を重視した授業展開ー	富永泰寛	第8号	2006
[47]	小学校スポーツ教材への取り組みー5年生『ハーフコートハンドボール』の提案ー	村田正之	第9号	2007
[48]	だれでも楽しめるぞ ハンドボール（3年）	山本繁	第9号	2007
[49]	ソフトハンドボールの指導についてー三宅小バージョンー	高松葉司	第9号	2007
[50]	学習量と技能を保障する体育授業の研究	竹内裕	第10号	2008
[51]	小学校におけるハンドボールの実践研究成果報告	竹村真弓	第10号	2008
[52]	ハンドボール（5年）	山本繁	第10号	2008
[53]	基本技能の定着と戦術の深まりをねらってー中学年におけるハンドボールの実践ー	高橋亨	第10号	2008
[54]	ミニハンドボールー低学年からのつながりを生かしてシュートゲーム桃太郎バージョンー（3年）	信原悦治	第10号	2008
[55]	明快、カラーコートハンドボール（第6学年）	渡邊和弘	第11号	2009
[56]	ラインゴールハンドボール（5年）	清水由	第11号	2009
[57]	小学生のハンドボール指導における処方能力の発生分析ー予備ゲームの教材づくりと関連してー	高橋喜春・佐藤靖	第12号	2010
[58]	ハンドボール（4年）	浅川泰裕	第12号	2010
[59]	壁ぶっつけ、はしごドッジボール（2年）ー投捕の力を高める教材ー	清水由	第12号	2010

表2 教材化・簡易化の工夫の観点別の分類

教材化・簡易化の工夫の観点	該当する〔表1〕の授業実践	
1. 物的条件	①コート	[2] [9] [10] [11] [12] [13] [20] [24] [28] [30] [32] [33] [35] [41] [43] [44] [45] [47] [48] [50] [51] [52] [53] [54] [55] [56] [58]
	②ゴール	[1] [2] [10] [12] [13] [20] [28] [30] [32] [41] [44] [45] [50] [51] [52] [53] [55] [56] [58]
	③ゴールエリア	[1] [2] [3] [9] [10] [11] [12] [13] [16] [20] [28] [30] [32] [33] [43] [44] [45] [50] [51] [53] [55] [58]
	④ボール	[1] [4] [13] [28] [30] [32] [33] [35] [41] [44] [45] [51] [53] [56]
	⑤プレーヤー人数	[1] [2] [9] [28] [30] [32] [35] [41] [44] [45] [47] [49] [50] [51] [55] [56]
2. 行為条件	⑥歩数制限	[9] [13] [16] [20] [30] [31] [32] [34] [35] [42] [44] [45] [47] [48] [49] [51] [52] [53] [54] [56]
	⑦ドリブル	[6] [23] [32] [44] [45] [49] [50] [52]
3. 教材配列の工夫	⑧低段階から高段階へ	[1] [3] [4] [8] [9] [10] [17] [18] [19] [21] [22] [24] [37] [38] [39] [40] [46] [47] [51] [53] [55] [56] [59]
	⑨リードアップゲームの導入	[1] [2] [4] [7] [8] [10] [15] [16] [17] [18] [19] [21] [22] [23] [24] [25] [26] [27] [31] [34] [36] [37] [38] [39] [40] [46] [51] [53] [54] [57] [59]

3. 1. 物的条件の変更による工夫

3. 1. 1. コートの変更による工夫

ハンドボールは通常40m×20mのコートで行われるが、対象とした実践研究ではほとんどの場合で正規のコートで行われているものはなかった。投能力の発達段階が低い小学生にとっては高学年でも40m×20mのコートでは広すぎると考えられる。使用されていたコートはバスケットボールのコートや、ハンドボールのハーフコートくらいの大きさのコートを使用しているものが多く、学年が低いほど狭いコートを使用する傾向がみられた。通常よりも狭いコートを使用することで児童同士の距離が近くなり、パスがつながりやすくなるということが狙いとされる。さらに、正規のコートでは大きく、場を確保することが困難であるという理由もある。

一方、児童の実態から、ボールを持っても次のプレーをすばやく決断することができず、ディフェンスに囲まれたり、ディフェンスが近くにいると委縮してしまい、思うようにプレーすることができないことが予想される。また、ボールに密集し、サイドまで利用して攻撃することも難しいと予想されたことから、大山(2003)は図1のような「ラインマンゾーン」を設定した。ラインマンゾーンは、攻撃チームの1名ずつが入ることができる安全地帯で、ディフェンスは入ることができない。ラインマンゾーンは、運動が苦手な児童も安心してプレーすることができ、落ち着いて正確にパスやシュートをすることができるようにと考えられたものであったが、運動が苦手な児童だけではなく、得意とする児童にも好評であったという。また、ゲームにおけるボールの軌跡を見ると、試しのリーグ戦ではラインマンゾーンを使う回数が少ないが、まとめのリーグ戦では大幅に増えており、特に、パス回数の増加が著しかった。これは、最初はサイドを使えていなかったために中央で攻撃することが多かったが、ラインマンゾーンを有効に使えるようになり、その良さに気付いたためであると考えられる。これらのことから、

ラインマンゾーンは、安心してプレーができること、戦術に生かせることなどの利点があることがわかる。

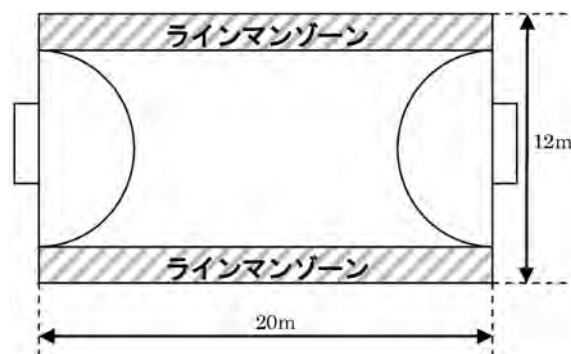


図1 ラインマンゾーン

3. 1. 2. ゴールの変更による工夫

ゴールの代わりに味方プレイヤーが台の上に立ち、そのプレイヤーがボールをキャッチすれば得点になる、ポートボールのような形で行われているものが多かった。低学年や中学年ではゴールの代わりに段ボールやコーンを使用しているものが多くみられた。段ボールやコーンに当てれば得点になるというルールである。この場合、多くはゴールキーパーをなくすというかたちで行われていた。通常のゴールを使用するよりも児童たちにとっては狙いやすくなり、得点機会が増えると考えられる。さらに、児童のコントロール能力も向上できるとされていた。通常のゴールでゴールキーパーがいるとなかなか得点ができないため、児童たちにとってはおもしろくないのである。ハンドボールでは得点を取ることが児童たちにとっては楽しみとされるところであり、その得点機会を増やすための工夫が多くされていた。

3. 1. 3. ゴールエリアによる工夫

ハンドボールは6mの半円のゴールエリアがあり、ゴールキーパー以外はゴールエリアに入っては行けな

いというルールがある。そのためプレイヤーは6 mラインからジャンプをしてシュートをするが、初心者や小学生にとってジャンプシュートは難しい。特に角度のないところからのシュートは経験者でも難しいとされる。その難しさをなくすため、ゴールエリアを台形にしたり、一直線にする工夫がされていた。そうすることで角度のないところからのシュートをなくし、シュートに対する難しさを緩和している。

渡邊(2009)は、図2のようなカラーコートハンドボールという実践を行っていた。これは、ハンドボールコートの特徴や、ルールを子どもたちにわかりやすく指導するためにカラーコートを準備し、スローインやフリースロー等の主なルールをラインの色を利用して示している。これは、教師側からみてもルールがわかりやすく、指導しやすいという利点もある。

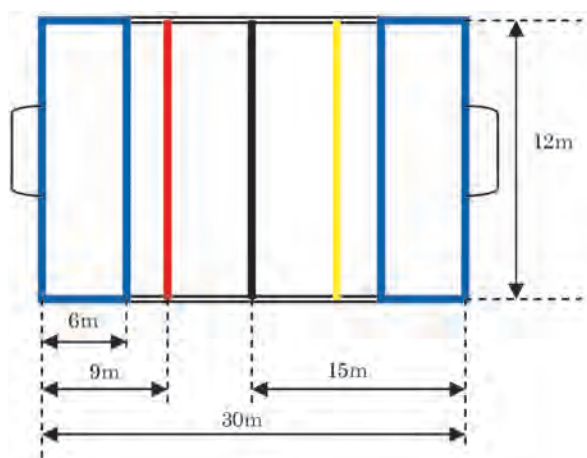


図2 カラーコートハンドボール

また、図3のようにゴールエリアを円にして360度どこからでもシュートを打てる形で行う実践例もある。この場合、ゴールはコーンや段ボールが使われており、ゴールの後ろ側に回ってシュートを打つなどの戦術が幅広く考えることができるため、ゴールキーパーの裏をかくことができるので得点の機会が増える。

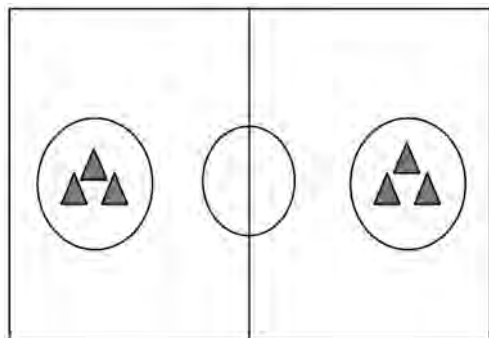


図3 ゴールエリアを円にする工夫

ゴールエリアの変更の工夫は、角度のないところからのシュートをなくすことでシュートに対する難しさをなくし、どこからでもシュートが打てるようにする

ための視点で行われている。また、角度のないところからのシュートはゴールキーパーの体や顔面に当たる可能性も高いため、そうした危険性を低減するための工夫がされている。

3.1.4. ボールの変更

ハンドボールの1号球を使用している実践が多い。1号球は柔らかい素材でできているものがあり、小学生でも片手で握ることができる。ボールが小さいため、投げたりしやすいがドリブルはしにくい。そのため児童はパスで攻めようとするため、ドリブルでの個人プレーを減らすことができる。さらに、柔らかい素材でできているため、ボールを怖がらずに思いっきりプレーをすることができる。清水(2009)は、ボールに対する恐怖感を取り除くために、柔らかい素材で作られたディスクを使用した。この場合、ドリブルができないため、パスでボールをつなぐ重要性に気付かせられる。ボールの変更の工夫は、主にボール操作しやすいボールを使用することと、ボールに対する恐怖感を取り除くことが狙いとされた工夫がされている。

3.1.5. プレーヤー人数の変更

ゴールキーパーを除くプレーヤー人数は3対3、4対4、5対5など、正規のハンドボールの6対6より少ない人数でほとんどの実践が行われていた(図4参照)。人数を減らすことによって児童一人一人のプレーに参加する機会が増え、ボールに触る機会を増やすことができる。単元の序盤では少ない人数で行い、後になるにつれて徐々に人数を増やしているものが多く、段階的に指導されている。攻撃をするときにゴールキーパーを攻撃に参加させても良いというルールを作り、いわゆるアウトナンバーを作り出せるようにし、攻撃側が有利になるような工夫もあった。アウトナンバーで攻めれば児童たちの考えた作戦が成功する機会が増え、戦術学習をより効果的に学ばせることができる。

このように、児童のプレー参加の機会を増やすことや、戦術学習をより効果的に行うためにプレーヤー人数の変更はされていた。

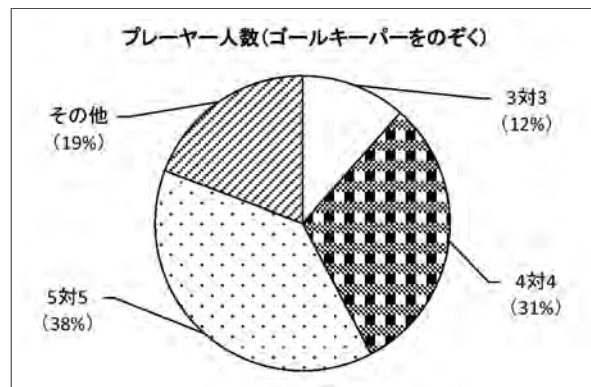


図4 プレーヤー人数の変更の内訳

3. 2. 行為条件の変更に関する工夫

3. 2. 1. 歩数制限に関するルールの変更

歩数制限に関するルールの変更の工夫は以下の(1)~(5)のパターンが見られた。

- (1) 3歩までよい
- (2) 5歩までよい
- (3) 10歩までよい
- (4) 歩数制限なし
- (5) 歩いてはいけない

ハンドボールは3~4歩までボールを持って歩くことができるため、バスケットボールに比べると歩数についての難易度は低いが、さらに簡易にする工夫がされていた。例えば、歩数制限をなくしたり、5歩までボールを持って歩いて良いとする、または明らかに歩きすぎているというときだけ反則を取るといようなルールを採用していた。歩数制限があるということが児童たちにとってストレスであり、思うようにプレーをすることを妨げているため、歩数制限について緩和することで児童たちは思い切ってプレーすることができ、考えた作戦の成功率が上がる。しかし、何歩でも歩いて良いというルールだとディフェンスが止められなくなる。そのため、ディフェンスにタッチされたら歩けなくなるというルールなども設定されていた。こうしたことから、歩数制限があるということがハンドボールの難しさの一つであるといえる。

一方、歩いてはいけないというルールを設定して実践を行い、パスによってボールを運ぶことの重要性を学ばせるための工夫をしている実践例もあった。

(1)(2)(3)(4)は技術に関しての緩和を行い、(5)は戦術に関する工夫をしているといえる。ただ単に技術の緩和をするのではなく、何を学ばせたいのかによって方向性を変える必要がある。

3. 2. 2. ドリブルに関するルールの変更

ドリブルに関するルールの変更の工夫は以下の(1)~(5)のパターンが見られた。

- (1) ドリブル禁止
- (2) 1回まで良い
- (3) 2回まで良い
- (4) 3回まで良い
- (5) ダブルドリブルの反則をなくす

(1)に関する実践ではドリブルを禁止すること、(2)(3)(4)に関する実践では回数制限をすることで能力の高い児童の個人プレーを抑制し、パスをつないでボールを運ぶようにさせるねらいがあり、チームプレーや戦術の重要性について学ばせることができる。

一方、(5)に関する実践ではダブルドリブルの反則をなくしていた。ドリブルやキャッチミスをして、もう一度自分でドリブルを再開することができ、児童たちはのびのびとプレーをすることができる。

ハンドボールはボールのサイズが小さく、投げるこ

とは比較的簡単であるが、ドリブルするのは難しい。しかし、ドリブルに関するルールの変更は、ドリブルの技術を緩和させることがメインではなく、パスを誘発させるためのルール変更であった。

3. 3. 教材配列による工夫

3. 3. 1. 低段階から高段階へ

ハンドボールの初心者や、低学年にとって、はじめからハンドボールを行うということは難しいと考えられる。そこで、多くの実践でハンドボールにつながる簡易ゲームとして行われていたのは、シュートボールやポートボールなどであった。シュートボールやポートボールはハンドボールの簡易化されたゲームと考えられており、低学年ではハンドボールを行うのではなく、シュートボールやポートボールで戦術学習を行うことが多い。シュートボールやポートボールは、ボールを手で持って走ったり、投げたり捕ったりして相手ゴールに攻め込み、シュートをするという「攻防入り乱れ型のゲーム」であり、ハンドボールやバスケットボールに発展する内容を持った基礎的なゲームである。低学年段階では、ボールを捕ったり投げたりするボール操作に慣れていない子どもが多い。シュートボールはパスやドリブルをしたりしてボールを進めることが十分できない低学年の子どもたちに適した教材である。

○シュートボールの実践例 (図5参照)

ゴールエリアは、どこからでもシュートできるように二重の円形で、内円の中心にカラーコーンや箱を置いたりして的にする。その的をねらってシュートし、的に当てたり的を倒したりすると得点となる。ドリブルがないのが特長で、ボールを持って走ることができる。そのため、ボール運動が苦手な子どもでも、シュートまで到達できる可能性が高くなる。ゲームの核心はシュートとパスであり、シュートする楽しさを味わわせながらも、シュートにつなげるパスを工夫させるこ

- ・ 1試合6分(前半3分・後半3分)程度。
- ・ チームの人数は3対3。
- ・ 相手陣のサークル内にある的にボールを当てたり、的を倒したら1点。
- ・ 相手陣のサークル内には入ってはいけない。
- ・ ドリブルは禁止。
(ボールを持って何歩でも移動して良いorボールを持って歩いてはいけない)
- ・ ボールをパスしても良い。
- ・ 相手に触ることや、タックルも禁止。

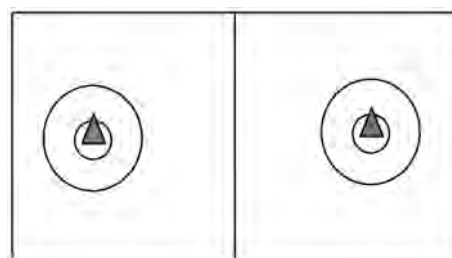


図5 シュートボールの実践例

とをねらいとしている。また、的の裏のスペースを確保したりして頭越しのパスなど、パスの効果的な使い方へ気づき、身につけることができる。低学年の子どもたちも「作戦」のおもしろさや、仲間と協力してシュートしたり、相手のシュートを防いだりするゲームの面白さを十分味わうことができる。

杉山（1999）は、低学年から高学年までの授業を図6のように行っている。次の学年につながる系統的な授業の展開であり、小学校でハンドボールを授業で取り入れた場合は、児童の発達段階に応じて段階的に行われることが望ましいと考えられる。

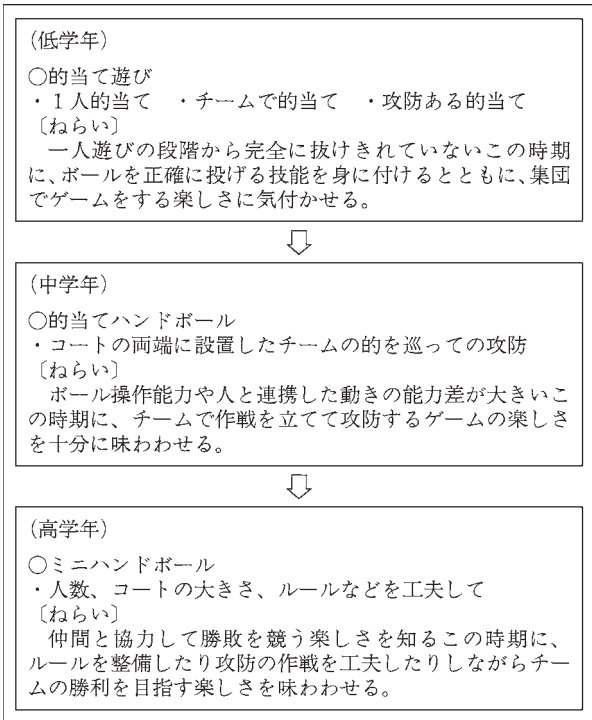


図6 低学年から高学年までの指導方法の例

3.3.2. リードアップゲームの導入

授業を行う最初の段階で、準備運動になりながらもハンドボールの基本的技能を身に付けさせるような様々なリードアップゲームが導入されている。（図7～図9参照）

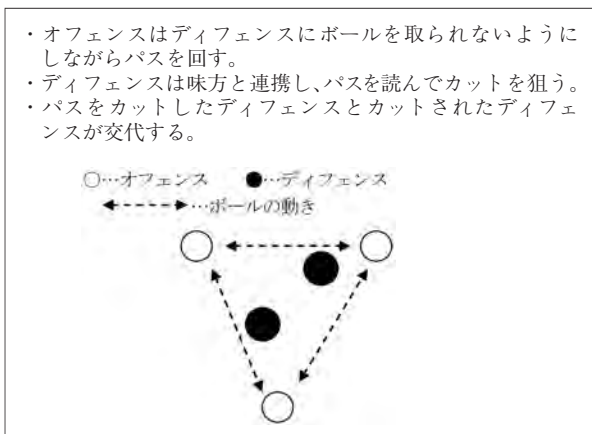


図7 ボール回しゲーム

3色ともえ鬼ごっこ

- ・周辺視野を広め、素早く動く力が育つ。
- ・ボールを持って行くと、ボールを持って動く力が育つ。

○は○を捕まえる。◎は●を捕まえる。●は○を捕まえる。捕まったらその場で固まって動けなくなる。同じチームの人に助けを求めると、再び動くことができる。

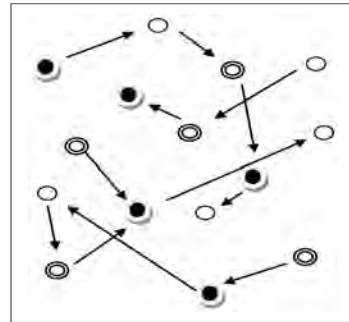
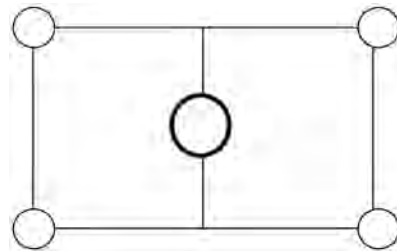


図8 3色ともえ鬼ごっこ

- ・4チームに分かれて行う。
- ・中央のサークル内に置いた7個のボールを自陣のサークル内に1つずつ運ぶ。先にボールを3つ集めたチームの勝利。
- ・スタートは、自陣のサークル。
- ・敵陣のサークルにボールを取りに行っても良い。
- ・1人のプレーヤーがボールを持って戻ってきたら、次のプレーヤーが出る。
- ・自陣で待っている人が指示を出す。



どこにボールを取りに行けばよいかなどの判断力や周りの状況を把握する能力が養われる。また、指示を出すことなどによってチームで協力して行うことができる。

図9 ボール集めゲーム

これらの他にも、的当てゲームやボールを使用したリレーなど、様々なリードアップゲームが導入されている。

また、ボール感覚づくりや、簡単なボール操作の能力を高める遊びのような要素を持たせたものも多数行われている。

(例)

ドリブルくぐり

思いきり地面に弾ませたボールをくぐる。(目標3回)

投げ上げキャッチ

- 拍手 …投げ上げている間に何回拍手ができるか。
- 回転 …投げ上げて1回転してキャッチする。
- ジャンプ…投げ上げたボールをジャンプしてキャッチする。
- 地面 …投げ上げて弾んだボールを地面の近くでキャッチする。

足踏みパス・キャッチ

- ・足踏みしながらパス、キャッチをする。
- ・いろいろな向きで行う。

前←	→前	横←	→横
前←	→横	前←	→背面
横←	→背面	など	
- ・ボールを2個で同時に投げ、ぶつからない工夫をさせる。低いパス、バウンドパス、ふんわりパスなど。

4. まとめ

ハンドボールの教材価値として以下のことがあげられる。

- ①「場」や「用具」の工夫がしやすい
- ②ルール変更による簡易化がしやすい
- ③易しい段階から難しい段階への発展性がある授業作りがしやすい
- ④「走・跳・投」の運動要素があり、小学生の身体発達を促すのに適している

実践報告を分析した結果、低学年では技術の難易度を緩和するための工夫が多くみられ、高学年では戦術を学ばせるための工夫が多くみられた。正規のハンドボールのルールで行われているものはほとんどなく、簡易化するという工夫がされていたことから、特に初心者や発達段階の低い小学生にとっては歩数制限やドリブルなどが難しいと考えられる。また、ジャンプシュートはほとんど見られなかった。ジャンプシュートは複合的要素を連続的に一度に行わなければならないため難しいと考えられ、小学生ではやらなくても良いものとして認識されていた。

ハンドボールが授業で取り扱いにくい原因として低学年から高学年に共通して言えるのは、ハンドボール

について知らない、イメージができないということであった。技術的要素や戦術的要素、ハンドボールのことに知らないということも含め、発達段階の低い小学生にとってハンドボールは難しく、競技と同じ形式で授業を行うことは難しいと考えられる。

現状では、ハンドボールの技術・戦術について教師の間でもあまりよく知られていない。そのため、指導方法もよく理解されていないため、授業で行われることは少ないが、過去の実践報告でも数多くあったように、技術やルールを簡易化してそれらの要素を緩和することで小学生の授業の中でも十分に扱うことができ、ハンドボールのことを知らない教師でも効果的に運動技能や戦術を学ばせることができるといえるだろう。

引用・参考文献

- 1) 荒木祥生・濱田隆男 (2011) 「ハンドボールに関する実態調査」学芸, 第57号, 7-14.
- 2) 宮本真一 (2000) 「小学校におけるハンドボールの教材化について」ハンドボール研究, 第2号, 40-42.
- 3) 大山あゆみ (2003) 「互いに認め合いみんなが楽しめるゲームの学習—ルールや場を工夫したハンドボールの学習を通して—」ハンドボール研究, 第5号, 56-71.
- 4) 渡邊和弘 (2009) 「明快、カラーコートハンドボール (第6学年)」ハンドボール研究, 第11号, 53-55.
- 5) 清水由 (2009) 「ラインゴールハンドボール (5年)」ハンドボール研究, 第11号, 17-20.
- 6) 杉山重利 (1999) 「小学校体育の新しい方向とボール運動」ハンドボール研究, 第1号, 5-15.
- 7) 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖 (1993) 『体育科教育学入門』大修館書店.
- 8) G. シュティラー・H. デプラー・I. コンツァク (1993) 『ボールゲーム指導事典』大修館書店.